

おおさか  
KEY  
わーど  
第22回

# 今も生きる天才画家の伝説

《煉瓦焼》《郵便配達夫》《ロシアの少女》



「煉瓦焼」 1928年 大阪市立近代美術館建設準備室蔵



「ロシアの少女」 1928年 大阪市立近代美術館建設準備室蔵

凍てつく寒さのなかにも、春の到来も予感させるこの季節になると、大阪が生んだ一人の天才画家のことを思い出す。

佐伯祐三…。明治31(1898)年、大阪府西成郡中津村(現、大阪市北区中津)の光徳寺に生まれた。大阪府立北野中学校(現、大阪府立北野高校)を卒業後、東京美術学校(現、東京藝術大学)で油彩画を学ぶ。大正12(1923)年、妻の米子と娘の彌智子を伴って渡欧し、パリで野獣派の巨匠モーリス・ド・ヴラマンクに刺激されて画風を変え、ユトリロの影響もあってパリ風景を重厚なタッチで描きだす。その後、一時帰国するが、すぐに再渡仏し、数々の名作を残しながら昭和3(1928)年、30歳でパリに客死した。

佐伯は8月に病死するが、すでに4月に病床に伏し、絵筆を握れたのは3月いっぱいであったようである。最後の僅かな期間にも、佐伯の画風は変貌していく。2月中旬から下旬、佐伯はパリから1時間ほどの美しい村モランへ、後輩の荻須高德、山口長男、横手貞美、大橋了介たちと写生旅行に出かけた。気温が氷点下にもなる2月のモランで苦行僧のように、村の風景や教会堂の連作を描き、最高傑作の《煉瓦焼》や《カフェ・レストラン》が誕生した。

そして3月の小雨が降りつづくパリ。雨に打たれながらの屋外写生で体調を崩しながらもこの時期、《黄色いレストラン》《郵便配達夫》《ロシアの少女》など、最後の生命の輝きに、伝説のようなエピソードが残される作品が誕生する。《郵便配達夫》は、アトリエで静養中、美しい白ひげの郵便配達夫をモデル

に頼んだ作品で、佐伯没後、妻の米子は「この白ひげの人は神様ではなかったか」と語っている。

冬から春へと移ろう日射しのなか、約80年前のちょうどいまごろ、佐伯は最後の作品群に絵筆を走らせていた。この季節になると、そんな佐伯の幻が私の脳裏に浮かんでくるのである。

北野高校には、一時帰国したとき、佐伯が恩師に贈った《ノートルダム(マント・ラ・ジョリ)》が大切に保管されている。以前、校長先生から、在校中の三年間の間に同校生は、必ず一回は特別にこの作品をみることになっているというお話をうかがった。日本美術史に名を残す天才画家を、後輩たちが大切に扱い、彼の偉業を目に焼きつけて成長する教育的意義は大きい。

出身校だけではない。佐伯は大阪が誇るべき芸術家である。建設計画から20年以上が経過したが、幸いにも大阪市の近代美術館建設準備室は、国内最大のコレクションとして佐伯の油彩画50点を所蔵している。どれだけ貴重で贅沢なコレクションか、あらためて言う必要もない。文化施設でどれだけ利益が上がるかを問う費用対効果以上に、美術館建設の遅れが、私には気がかりだ。

いや、そんな話さえどうでもよい。佐伯の創作意欲が最後に燃えあがったこの時期、心身を賭して創作に打ち込んだこの天才画家の生涯をしのぶことで、人間として深く感動させられる。大阪の生んだ芸術家達を知り、彼らを顕彰することは、現代に生きる大阪人にもはげみとなるはずだ。